

[補遺]
まえがき

風間 伸次郎

1. 企画ならびにデータ収集に至った経緯

『語学研究所論集』では、これまで「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイス」という統一テーマを組んで、諸言語のデータを収集してきた。

俗に TAM (テンス・アスペクト・モダリティ) と言われるが、これにヴォイス(受動を含む)を加えたものは、一般的に動詞の文法的カテゴリーの代表的なものと考えられている。もちろんさらに極性(肯定/否定)や証拠性(evidentiality)など、研究すべき動詞のカテゴリーは多いが、いちおう上記の4回の特集は動詞の文法カテゴリーをある程度カバーしているということができると思う。

しかし一方で、残念ながら収集できた言語データの量は決して多いとは言えない。しかもウラル語族やアフロ・アジア語族の言語など、重要な語族の言語が全く欠けていた。アフロ・アジア語族の中でもたとえばアラビア語は影響力のきわめて大きい大言語であり、外大の27地域言語にも入っている言語である。また言語によっては、一部の特集のデータはあるが別の特集のデータは欠けている、というような状況もある。

このような状況を少しでも改善するために、研究者のみならず院生にも協力を仰いで、上記の動詞の文法カテゴリーに関するデータ収集をお願いした。このような経緯で今号にはこの[補遺]が掲載される運びとなった。

データの集まった言語は、フィンランド語(ウラル語族)、アラビア語(アフロ・アジア語族)、サハ語とウズベク語とトゥバ語(3つともにチュルク諸語)である。さらに、私風間もナーナイ語とソロン語について、欠けていた部分のデータを収集することができた。

しかし依然として、新大陸やオーストラリア先住民、ニューギニアやカフカースは言うに及ばず、ドラヴィダ語族やニジェール・コンゴ語族などの言語のデータもない。より多くの言語のデータの収集が今後の課題である。他方、中国語や、ロシア語、フランス語のデータの蓄積は同時に貴重な媒介言語の questionnaire としての意味もある。これらはすでに一部その目的で使用されているが、今後もこれらにより少しずつでもより多くの言語のデータが収集されていくことが期待される。